

令和4年度

学校支援事例報告集

—教育委員会や学校と連携した実践的研究について—



目 次

はじめに	1
01 徳島県高等教育機関連携型「ジュニアドクター発掘・養成講座」 理科教育コース 早藤 幸隆 他	2
02 NITS 四国アライアンス鳴門教育大学センターを活用した 徳島県教育委員会・徳島県立総合教育センターと連携した校内研修ファシリテーター 養成研修プログラムの開発 学校づくりマネジメントコース 前田 洋一 他	4
03 高校の理数探究学習に有用な教材および学習活動の開発と探究指導力を備えた 理科教員の養成 理科教育コース 寺島 幸生	6
04 道德教育における道德科授業の工夫 生徒指導コース 岡田 康孝 他	8
05 ヴィゴツキーの言語・思考理論を基盤とした、読書指導プログラムの作成 学習指導力・ICT 教育実践開発コース 皆川 直凡 他	10
06 道德教育における道德性の育成評価のための尺度の作成 生徒指導コース 池田 誠喜 他	12
07 徳島県内の学校園における家庭教育支援推進に関する実践研究 ーオンラインと対面のハイブリッド型養成講座の可能性ー 幼児教育コース 木村 直子 他	14
08 学校予防教育は、誰に、どこに、効果があるのか ー小学1年生から教員までを対象とし、本当の自己肯定感、そして学校と職場適応の観点からー 心理臨床コース 心理・教育科学領域 山崎 勝之 他	16
09 しらさぎ中学校との連携協定における日本語教育実習・教材作成、教員への 教育研修に関する実施と整備について グローバル教育コース 宮部 真由美 他	18
10 教科部会（縦のつながり）とメンター制研修（横のつながり）を活用した 教育課題の改善 学校づくりマネジメントコース 前田 洋一 他	20
11 「ポジティブな行動支援」の推進 ～関係機関（行政・専門家）との連携、および記録用紙の実用化に向けて～ 特別支援教育コース 坂口 純子 他	22
12 校内サークル型メンター制研修 （若手教員の育成を軸とした全教職員の力量形成を目指して） 学校づくりマネジメントコース 前田 洋一 他	24
13 園内の学びの環境の改善と新しい学びの創造の有効性について 幼児教育コース 佐々木 晃 他	26

はじめに

本年度より、本学は第4期中期目標期間となり、地域連携センターの取り組みも変わりつつある。そのキーワードとなるのが、「社会共創」である。社会共創とは、多様な地域課題の解決に向け、地域が持っている実践知と大学が持つ科学知を統合し、取り組みを進めていくことにある。そのハブとして、地域連携センターが位置づいていくことを目指している。

これまでも、教育委員会、学校園、地域が抱える課題を大学が支援する取り組みを行ってきたが、それらを一覧できる形となっていなかった。今年度より、学校支援事例報告集を発行し、県内の教育委員会、学校に配布することとした。これを通して、学校等への支援事業を一覧できる形となった。

GIGA スクール構想の推進、学力の向上、不登校問題の改善、働き方改革の実現、コミュニティスクールを軌道に乗せる、といった解決すべき様々な課題が学校現場に迫っているが、それをどのように解決していくか、どのように外部の力を借りるのか、イメージできないことが多いのではないかと。

この事例報告集は、いわば、レストランのメニューに相当するものである。メニューがないと、お腹はすいているが、何を注文していいかわからない。店から「お客様のご希望に添って、何でもお作りします」といわれても、気後れしてしまうだろう。「このような取り組みは、本校をより良くしていくことにつながるのでは」と思っていたら、大学と一緒に取り組めないか、と考えたら、是非とも地域連携センターにコンタクトをとっていただきたいと考えている。本センターがハブとなり、学校園と大学の教員をつなぎ、取り組みの後押しをしていきたい。

本事例報告集が、徳島の教育改善につながることを切に願っている。

鳴門教育大学地域連携センター所長 葛上秀文

徳島県高等教育機関連携型 「ジュニアドクター発掘・養成講座」

徳島大学, 徳島文理大学, 四国大学, 阿南工業高等専門学校

徳島県教育委員会, 徳島市教育委員会, 鳴門市教育委員会

01

理科教育コース **早藤 幸隆**

教育探究総合コース **胸組 虎胤, 田村 和之**

技術・工業・情報科教育コース **曾根 直人**

課題設定

鳴門教育大学を中核機関として、徳島大学・徳島文理大学・四国大学・阿南工業高等専門学校、以上徳島県内の全ての高等教育機関と共に、徳島県教育委員、徳島市教育委員会、鳴門市教育委員会と協同し、地域の教育機関・大学教員、科学技術分野の関連機関及び専門家と連携して、理数・技術（情報）領域に高い意欲と才能を有する小学校5・6年生及び中学生を対象に、問いの資質能力（“探る・究める・発見する”）を重視した幅広い科学技術分野の専門研究における探究活動を取り入れた二段階の教育プログラム（研究基礎・標準コース，研究応用コース）を実施することで、科学技術者としての目的意識と将来像を備えた社会を牽引する未来の科学技術者であるジュニアドクターを発掘・養成する。

課題解決の方針

①資質・能力を基盤とし、受講生に科学研究の要素を含む発展的な学習経験や興味関心を助長する科学的・技術的体験を提供すると共に、受講する子供たちの才能を見出し、地域の実情に即して才能ある子供たちが学ぶことができる理数・技術教育システムを構築する。

②学校、教育委員会、地域の関係機関や科学・技術者等の専門家から構成される「ジュニアドクター発掘・養成講座」運営委員会を中心とし、受講生の能力に応じた研究応用プログラムや課題研究指導を実施する。

③受講生の科学や技術に関するキャリア意識を高め、科学者や技術者のロールモデルの形成につながる体験や情報を提供するなど、受講生の科学・技術の創造に関わる意欲を伸張させ、理数系を目指す進路選択の推進を図る。

④小中学校教員が関係機関等とのネットワーク構築や学校における学びとつなげる役割を果たすことが出来るように、教員としての資質向上及び長期的な子供たちの才能育成システム環境の維持・発展を実現する。

具体的な取り組み

今年度の研究応用コースは、研究応用要素に重点を置いた受講生の能力・資質の育成を目指し実施した。

◆研究テーマの設定

研究テーマの設定は、受講生の興味・関心が高い課題を重視すると共に、実施期間内に実現可能性があり、研究室マッチングにおいて研究指導教員と受講生との面接により、受講生が課題に没入でき、社会的・学問的に意義があるテーマを決定した。

◆指導方法（展開）の工夫

研究応用コースの指導は、鳴門教育大学、徳島大学、徳島文理大学、四国大学、阿南工業高等専門学校の教員が、幅広い分野・領域で研究指導を担当した。課題研究は、月に数回（主に土日又長期休暇中は、実施回数を増加）程度とし、受講生の研究進捗を見極めながら実施回数を調整した。研究実施場所は、研究指導教員の研究室とし、実施時間は13時から17時とした。研究テーマは、原則として研究指導教員の専門領域に従い、実証的な研究を奨励した。

◆研究指導の工夫

研究指導は、研究指導教員がほぼマンツーマンで受講生の研究活動を実施し、ディスカッションを通して受講生のやる気を引き出すと共に、思考段階を導き出し、主体性の確保に努めながら、研究遂行スキルの育成に努めた。また、研究応用コースの受講生を対象として、研究倫理（生命倫理）及び科学英語に関する講義を実施した。研究倫理に関する講義では、責任と倫理を意識し、研究応用コースにおける課題研究を遂行する事を意識付けた。科学英語に関する講義では、科学英語による論文（概要）の書き方及び科学英語の専門用語について論ずると共に、研究応用コースの受講生に科学英語の必要性を理解させた。

◆終了後の指導者の振り返り

研究応用コースを推進するため、研究活動中に定期的に受講生の面談を行い、研究の進捗状況や受講生の意欲・能力等を確認すると共に、「ジュニアドクター発掘・養成講座」運営委員会等に報告し、組織として継続的に対応可能な状況を維持した。また、実施担当者間で活動状況を把握し、研究活動の改善に努めた。更に、研究活動の成果発表としては、「ジュニアドクター育成塾」全国受講生研究発表会、受講生研究成果発表会（実施機関が開催）に向けて、受講生は研究指導教員から指導を受けながら、研究成果の輩出を促進した。

◆その他

課題研究の分野・領域、テーマなどにより異なるが、自宅等での受講生の研究活動として、課題に関する演習の継続、実験結果におけるリサーチラポノートへのまとめとデータの解釈、測定実験の数的処理、分析機器のスペクトルデータの解析、研究指導教員から配布された文献資料のまとめ等を実施し、随時研究支援を行った。

取り組みの成果

◆受講生の成果

- 第66回日本学生科学賞徳島県審査の最優秀賞（知事賞）2件
- 第66回日本学生科学賞徳島県審査の優秀賞（県教育長賞）1件

◆修了生の成果（追跡調査）

- 科学オリンピックにおける化学グランプリ2022（二次選考）の銀賞
- 国際化学オリンピックの日本代表候補生に選出
- 令和4年度SSH生徒研究発表会のポスター発表賞
- 2022年日本化学会中国四国支部大会（広島大会）の優秀発表賞



読売新聞記事(2022年11月5日(土))



読売新聞記事(2022年11月30日(水))

今後の展開可能性

理数・技術（情報）領域に強い意欲と高い才能を有する子供たちには、これまでの日本の For All 中心の教育体系を見直し、For Excellence（“創造的知”）を中核に裾野を広げて For All に連なる先進的な科学技術教育を進める必要がある。これらの成功の鍵を握るのは、児童・生徒の人的成長と基礎学力の育成に重要な役割を果たす質の高い教員の養成である。その教員養成の中心となるのが教員養成系大学である。そのために、教育学系と理工学系（教育の世界と研究の世界の協同）が連携し、科学的・技術的な思考力・判断力・表現力を育む科学・技術実験プログラムの開発と共に、それらを有効に活用した実践的検証を持続的に推進できる組織体制（科学・技術教育支援拠点校の設置）の構築を推進する環境整備が必要である。

NITS四国アライアンス鳴門教育大学センターを活用した 徳島県教育委員会・徳島県立総合教育センターと連携した 校内研修ファシリテーター養成研修プログラムの開発

独立行政法人教職員支援機構（NITS）、徳島県教育委員会、徳島県立総合教育センター ……

02

学校づくりマネジメントコース **前田 洋一, 大林 正史, 竹内 敏, 藤田 完**
生徒指導コース **池田 誠喜**
学習指導力・ICT教育実践力開発コース **泰山 裕**

課題設定

「令和の日本型学校教育」は、学校がそれぞれの教育課題に対応した学びを学校組織全体で行うことで実現する。そして、そのためには、教師等の資質・能力の向上が必要であり、今後各学校では、校長のリーダーシップのもと、校内研修をより活性化させることが重要となっている。指導主事は、学校における教育課程、学習指導その他学校教育に関する専門的事項の指導を行うが、現状は担当教科についての指導が中心となっており、必ずしも担当教科の内容を超え、学校力向上の指導・助言までは十分にできていない。しかし、これからの指導主事には、学校力向上を推進できる教師や教職員集団の育成に向け、校内研修をより活性化させるファシリテーターとしての役割も求められている。「効果的・効率的な研修形態の構築」を実現するために、「校内研修ファシリテーター養成講座」の実施に向けた検討を行う。

課題解決の方針

「校内研修ファシリテーター養成講座」のターゲットとして指導主事を設定し、学校の課題のを見つけ方やその解決への手法等を理解させるとともに、各課題の解決のために、どのような校内研修をすれば良いかを提案できる能力を身につけさせる。そして、学校訪問で適切な指導・助言を行うことで学校力向上を図ることを目的とする。具体的には、鳴門教育大学や実際の学校現場での集合研修と、「大学連携強化！学校力向上拠点校事業」で実施する学校訪問での実践研修を効果的に活用し、これからの指導主事にとって必要となるファシリテーション能力の育成を図る。

具体的な取り組み

校内研修ファシリテーター養成研修プログラム検討委員会

NITS・徳島県教育委員会と共同で実施してきた「主幹教諭研修」の実勢を踏まえ、校内研修ファシリテーターとして必要な資質・能力の検討とそれらを養成するために必要なプログラムの検討を、校内研修ファシリテーター養成研修プログラム検討委員会で行う。

- ①校内研修ファシリテーターとして必要なスキルの検討
- ②研修講座または養成プログラムとして必要な要件の検討
- ③アライアンスセンターを使った研修の構築

開催日時 8月9日（火） 9月13日（火） 10月24日（月） 12月21日（水）

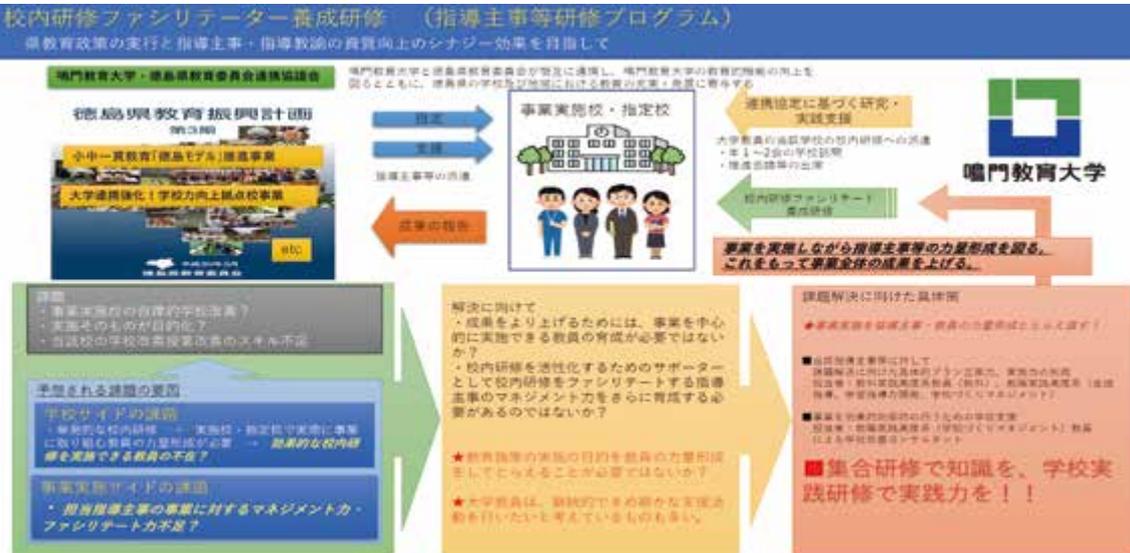
出席メンバーは、検討内容によって変更

取り組みの成果

①校内研修ファシリテーターとして必要なスキルの検討

指導主事に必要なスキル			
<p>「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(平成27(2015)年12月21日)中央教育審議会答申)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○使命感や責任感 ○教育の愛情 ○教科や教員に関する専門的知識 ○実践的指導力 ○総合的人間力 ○コミュニケーション能力 ○柔軟な対応力 	教育施策の立案・調整	教育施策に関する知識・理解	国・徳島県の施策および方針等を理解した上で、各学校および市町村教育委員会における施策および方針等を立案し、各学校を指導できる
	教育課題に関する指導・助言	教育課題に関する知識・理解	国・徳島県、市町村の施策および方針等を理解した上で、各学校および徳島県における施策および方針等を立案し、各学校を指導できる
	学校経営に関する指導・助言	学校改善に関する知識・理解	学校改善に関する施策および手法等を理解した上で、各学校および徳島県における施策および対応策を立案し、各学校を指導できる
	学校経営に関する指導・助言	学校経営に関する知識・理解	国や自治体の施策等や学校経営に関する理論等を理解した上で、各学校および自治体における施策および方針等を立案し、各学校を指導できる
	学習指導・生徒指導・研修に関する指導・助言	教員の資質能力に関する理論および基本的事項を理解し、各教員の状況を理解した上で、各学校及び徳島県全体の施策や対応策を立案し、各学校へ指導できる	教員の資質能力の向上に関する理論および基本的事項を理解した上で、研修プログラムを管理および検証し、徳島県全体での教員の職能開発を指導できる
	児童・生徒指導等についての知識・理解	生徒指導に関する理論および施策等を理解し、各学校の状況や分析結果を理解した上で、各学校及び徳島県全体の施策や対応策を立案し、各学校へ指導できる	教育課程編成に関する理論および施策等を理解し、各学校の状況や分析結果を理解した上で、各学校及び徳島県全体の施策や対応策を立案し、各学校へ指導できる
	児童・生徒指導等についての知識・理解	学習指導要領の内容及び施策等を理解した上で、各学校および徳島県内の学習指導要領の実施に当たって指導できる	

②研修講座または養成プログラムとして必要な要件の検討



③アライアンスセンターを使った研修の構築



今後の展開可能性

令和5年度から実施できるよう関係機関との連絡調整、計画

高校の理数探究学習に有用な教材 および学習活動の開発と 探究指導力を備えた理科教員の養成

徳島県内公立高等学校

03

理科教育コース 寺島 幸生

課題設定

高等学校において「理数探究基礎」「理数探究」の理数科目が新設されたが、多くの学校では指導ノウハウが依然乏しく、指導に苦勞する学校・教師が多いと想定される。したがって、探究学習を効果的に実践するための教材や指導法の開発が課題となっている。

課題解決の方針

理数科を設置する徳島県内の高等学校と連携・協力して、高校で理数探究学習を実践する上での具体的な問題点を調査する。見出された諸問題を踏まえ、生徒／教員が理数探究学習を円滑に遂行できるような手引きや補助教材等を試作し、それをを用いた教育活動を実践して理数探究学習の充実を図る。

具体的な取り組み

- 1) 2022年5月～8月、理数探究学習を実践する上で障壁となっている具体的な問題点について、理数探究に取り組む徳島県内の公立高校理数科の生徒や理科教員を対象に質問紙調査や聞き取り調査を行った。
- 2) 2022年9月上旬、上記1)の調査で見出された諸問題を整理し、その解決に資する手引きや教材等を試作した。
- 3) 2022年9月中旬、上記2)で試作した教材を用いて、理数探究の進め方に関する導入的授業を、徳島県内の公立高校理数科1年生を対象に実践した。
- 4) 2022年10月、上記3)の授業の結果を踏まえて、理数探究学習を効果的に指導する上で教師に求められる知識や技能を抽出、整理した。また、授業を受講した高校生は、学んだ理数探究の進め方を参考にして、グループで理数探究テーマを設定し、その研究計画を立案した。
- 5) 2022年10月下旬、上記4)の高校生による理数探究構想発表会に参加し、高校生のテーマ設定および研究計画に対して指導助言を行った。
- 6) 上記1)～5)と並行して、理科教員を志望する本学学生が、理数探究学習に関する専門性や指導力の基礎を習得できるように、大学生向けの教材を試作し、それをを用いた学修活動を実践した。
- 7) 2023年1月～2月、開発した教材や指導法の効果と課題について、徳島県内公立高校の理科教員と評価・点検し合い、教材・学修活動の修正・改善を行った。

取り組みの成果

理数探究に取り組む県内理数科高校生や高校教員が抱える具体的な課題が明らかとなった。特に、高校生、高校教員の多くは、校内・授業内で実行可能で適切な難易度の探究テーマの設定に困難を感じていることが判明し、この解決に資する生徒向けの探究の手引きやワークシート（下図参照）、教師向けの指導ガイド等を開発した。また、これらの開発教材を用いて、高校生が身近な自然現象を体験しながら、理数探究の進め方について学ぶための授業を実践した。参加生徒からは、探究のテーマや仮説の設定、探究のプロセスについて具体的に理解が深まったという肯定的反応が得られた。また、理科教員志望学生が理数探究の効果的な指導法について学ぶための教材を開発し、それを用いた学修活動を実践した。受講学生からは、理数探究における具体的な指導のノウハウを学ぶことができ、将来の指導に対する不安が軽減したという肯定的反応が得られた。

今後の展開可能性

本研究で試作した探究のテーマ設定について学ぶ教材は、初めて探究学習に取り組む生徒向けに開発された。理数科で行われる理数探究だけでなく、高校の理科・数学や総合的な探究の時間、中学校での理科・数学、総合的な学習の時間等の授業にも活用可能だと想定される。今後より幅広い学習場面で試作教材を活用し、その教育効果と課題が明らかになれば、中高生の探究学習のさらなる充実・発展に貢献できると期待される。

作成者氏名 ()
作成日 (/ /)

課題研究テーマ設定ワークシート

【キーワード】 現在研究したい分野や興味あるキーワードは？

【リマインド】 過去に興味を持った自然現象、取り組んだ自由研究、好きな科目や学習内容は？

【レビュー】 そのキーワード・現象・研究等に関して、どんな情報・先行研究を知っている？

文献情報・研究概要

解明されていることは？ ✓ ✓ ✓ ✓	未解明なことは？ > > > >
---------------------------------	------------------------------

【(仮・本) テーマ】 今興味があり、やってみようという研究にとりあえずタイトルをつけるなら？

【リサーチクエスト】 その研究で一番解決したい疑問は？

【仮説】 その疑問に対する仮説とその根拠は？

仮説：
根拠：(なぜなら)

作成者氏名 ()
作成日 (/ /)

【テーマ設定の構成要素】

どんな現象を どんな視点・方向から 何を観て、どんな量を測って どんな器具や方法を用いて	研究イメージ 縦軸 (結果) () 予測される関係性 ↑ 原点 (基準) () ← → 横軸 (条件・原因) () ↓
---	---

【コメント】 記入後のこのワークシートに対する先生・友人からの評価・コメントは？

【チェックリスト】 設定したテーマは妥当で実行可能か？

- 解明されていることと未解明なことの境界をはっきりしているか
- 現状把握だけ、答えが自明な研究テーマになっていないか
- リサーチクエストは具体的か (曖昧で漠然としたキーワードの羅列になっていないか)
- テーマ設定の構成 4 要素が含まれているか
- 得られる結果 (概数値、グラフの傾向など) がイメージできているか
- 解決の見通しが立ち、学校や家庭で準備できるものを用いて期限内に解決できそうか
- 独りよがりでないか (自分以外の誰かから興味を持ってもらえるか)
- テーマ・リサーチクエスト・仮説が 1 : 1 対応 (正対) し、一貫しているか
- ちょっと試しにやってみるか
- その他 ()

↑ほぼ全てにチェックが入ったら、【仮テーマ】を必要に応じて修正し【本テーマ】に

テーマが決まったら、このワークシートを参考に、より具体的な研究計画を立てて (研究計画書を作成して) から研究を始めてみよう。やってみてうまくいかないときは、どの部分がうまくいかなかったのか振り返り、修正しよう。

道徳教育における道徳科授業の工夫

04

生徒指導コース **岡田 康孝**

教育探究総合コース **金野 誠志**

国府小学校 **宮内 初恵**

鳴門教育大学附属小学校 **斉藤 想能美**

課題設定

小学校道徳教育における道徳科の授業方法について、授業方法の効果に関する授業実践研究を行う。理論と実践の往還関係による実践研究を進め、現場のニーズの一つである道徳科における学習活動の具体化を図る。

課題解決の方針

本研究では、道徳科に求められている4つの学習活動について検討し、具現化を図るものである。道徳の時間が道徳科に以降するにあたり、「考え議論する道徳」への質的転換を求められた。それを具現化する学習活動として4つの学習活動が例示された。

しかし実際に行われている学習がそれら4つの学習活動として実施されているか確認できないことが課題となっている。そこで学校教育における道徳科の4つの指導方法について、研究代表者及び共同研究者で先行研究と教育実践をもとに、道徳科の学習活動についてのあり方を検討する。

それを踏まえ学習過程を具体化し、教育実践を行い効果を測定する。さらに効果測定の結果や授業実践の検証を踏まえ、指導過程のブラッシュアップを進める。

具体的な取り組み

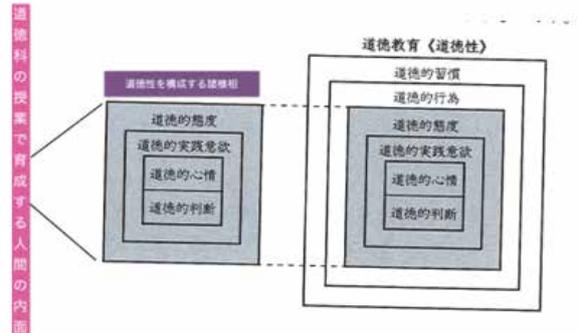
- ・道徳教育研究発表会への参加
(四国・小・中学校道徳教育研究大会)
- ・鳴門教育大学所属教員による道徳教育に係る講演、研修会
- ・授業検討会

<研修内容>

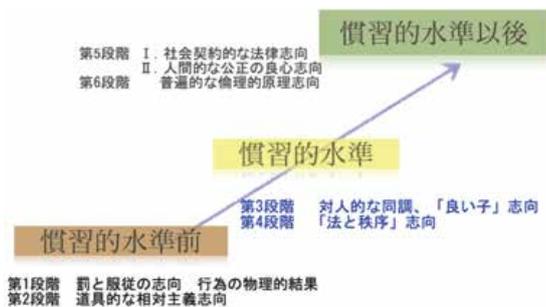
道徳性の理解(研修会での学習コンテンツ)

道徳性とは内面化された道徳に基づいて道徳的行為を可能にする特性

道徳性は、実際にみられる行為や行動とそれを発揮させるための人の内面（こころ）の両方として捉えられています。



早川 2014 新しい道徳授業 Gakken より 流田が修正



これからの授業構想

- ① ① 道徳的諸価値についての理解
- ② ② 自己を見つめ、
- ③ ③ 物事を多面的・多角的に考える
- ④ ④ 自己の生き方についての考えを深める



取り組みの成果

本実践の共同研究校は、令和5年に県の道徳教育研究発表、令和6年に全国小学校道徳教育研究会場校として本年度より研究活動を行っているが、公開授業の会場校として授業改善を図り、教員の授業力向上が目指されていた。今回、授業改善の試みとして、道徳科の4つの学習活動を具現化するために、学習活動の理解を深める研修、授業づくり、評価を実施し、成果と課題について検討したことにより、道徳科の学習活動の工夫についての知見を深めることができた。

今後の展開可能性

本実践研究を通して、次年度以降の授業改善に向けたイメージやアイデアが整理され、来年度の道徳教育の充実が図られるとともに、さらなる授業改善と研究発表のための基礎的な力となることが期待される。

ヴィゴツキーの言語・思考理論を基盤とした、読書指導プログラムの作成

05

学習指導力・ICT教育実践開発コース **皆川 直凡**

徳島市北井上小学校 **横山 武文**

佐那河内小学校・中学校 **清水 愛**

徳島県立池田高等学校三好校 **橋本 夏代**

大阪府立水都国際中学校・高等学校 **桑谷 健一郎**

課題設定

高等学校における教育課題として、文章の読みが浅く、広汎な学びに活かせないことがあげられる。この課題への対処のためには、読む、書く、話す、聞くという言語活動を通して思考・判断・表現力を育成する取り組みが求められる。学力差がある中で取り組むためには、小学校からの教育を見直す必要がある。

課題解決の方針

さまざまな発達段階の児童生徒の教育にあたっておられる先生方にご参加いただき、思考と言語との関係についてのヴィゴツキー（Vygotsky, L.S.）の理論と、各教育現場における児童生徒の言動との関わりについて探究する。こうした探究をとおして得られた知見をもとに、小・中・高を見通し、設定課題の解決に寄与する読書指導プログラムを作成する。

具体的な取り組み

研究代表者は、県内各地の小学校、中学校、小中一貫校、高等学校、近県の中高一貫校といったさまざまな校種、さまざまな教科の先生方（養護教諭を含む）とともに、月1回研究会を開催し、思考と言語との関係についてのヴィゴツキーの著作を輪読し、その論述と各学校種における児童生徒の言動との関わりについての議論を積み重ねてきた。

上記の研究会のメンバーのうち国語教育を専門とするメンバー4名（小学校、小中一貫校、中高一貫校、高等学校の教員）と研究代表者は、理論と実践の往還を図り、小学校から高等学校までを見通した読書指導プログラムを構築することをめざして6月から7月にかけて打ち合わせを行い、月1回、上記とは別日程で読書教育研究会を開催することにした。この研究会では、課題解決に寄与すると考えられる読書教育関係の書籍や論文を課題図書として読んで要旨を発表し議論する、各メンバーの教育実践や実践研究を発表し議論する、国語科におけるICT活用の理論と実践について議論する、といった協働的活動を通して考究を深めた。時節を考慮し、基本的にオンライン開催となったが、その過程でGoogle Classroom, Zoom, Whiteboard等のICTを駆使することとなった。

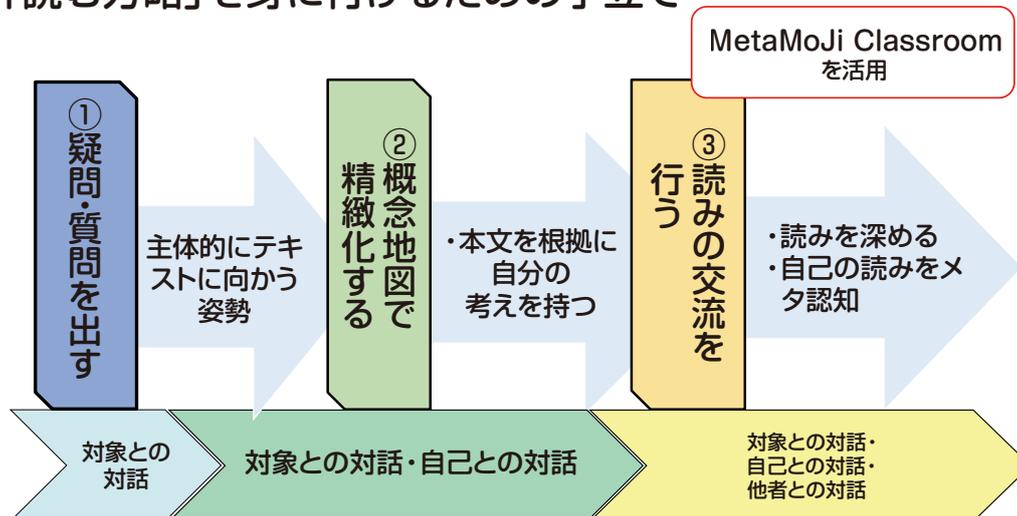
● 読書教育研究会のスケジュールと各回の研究主題

	日 程		主 題
第1回	8月25日	16:00～17:00	高等学校の教育課題と小学校からの教育
第2回	9月10日	13:00～15:00	読書へのアニメーション, 読書の発達過程
第3回	10月7日	17:30～19:30	読むために書く, 書くために読む 読書指導法の改善と個の変容, ICT活用の理論と実践
第4回	11月11日	17:30～19:30	「他者」を発見する国語の授業 メタ認知, 三つの対話, 交流を促す問い
第5回	12月16日	17:30～19:30	単元を貫く学習課題と言語活動 読書教育プログラムの基本的枠組の確認
第6回	1月20日	18:00～20:00	読書教育プログラムの骨格の完成
第7回	2月22日	18:00～20:00	読書教育プログラムの改善—実践に向けて—
第8回	3月(日時未定)		読書教育プログラムの汎用性—次年度に向けて—

取り組みの成果 ●

読む, 書く, 話す, 聞くという言語活動を通して思考・判断・表現力の育成を図り, 文章の読みが浅く, 広汎な学びに活かせないという教育課題の解決に寄与する読書指導プログラムとして, ヴィゴツキーの言語・思考理論に裏打ちされた, 「自ら問い続ける活動によって文章の読みを深め, 読もうとする意欲を高める授業」の国語科学習指導案を作成することができた。「メタ認知」, 「三つの対話(対象との対話, 自己との対話, 他者との対話)」, 及び「交流を促す問い」を共通のキーワードとしつつ, 小学校から高等学校まで, 児童生徒の発達段階を考慮してアレンジすることができ, 校種間の連携に寄与する可能性のある読書教育プログラムを開発することができた。この読書教育プログラムでは, 下記の構想図に示すように, 児童生徒が「読む方略」を身につけるための手立てを段階的ならびに融合的に取り入れ, 読みの交流場面を中心に, MetaMoji Classroom を活用する。

「読む方略」を身につけるための手立て



国語科の授業にとどまらず, 他教科への応用, 図書委員会や読書会など教科外における活動などに発展させていく可能性についても, メンバー間で共有することができた。成果の一部については, 外部に向けても発信した。

今後の展開可能性 ●

今年度の研究では, 設定課題の解決に寄与する読書教育プログラムを開発することはできたが, 実行に移すには至らなかった。次年度には, 共同研究者や研究会メンバーの学校で実践し, 設定課題の解決への寄与を検証する研究へと発展させられる可能性があり, メンバーの承諾を得ている。そのための研究会を2月と3月に予定している。

道德教育における道德性の育成評価のための尺度の作成

06

生徒指導コース 池田 誠喜

国府小学校 細井 康宏, 高見 寛子

教員養成特別コース 北濱 亮

課題設定

道德教育における道德性の育成に関わる評価は、授業の観察や発言・記述表現などから操作的に行われてきており、教育効果を測定するにあたり、教育実践者としては科学的な評価をし難い状況にある。そこで、道德教育の内容項目と道德性の諸様相を踏まえて道德性を定義づけ、把握可能な部分を測定することで道德性の育成に関わる評価について検討した。

課題解決の方針

学校教育における道德性について、研究代表者及び共同研究者で先行研究と教育実践をもとに定義づけ、定義を基に道德性に関わる特性について把握するための尺度を作成する。尺度作成にあたり妥当性及び信頼性について検討し標準化を図る。

具体的な取り組み

道德教育の内容項目と道德性の諸様相を踏まえて道德性を定義づけ、把握可能な部分を測定することで道德性の育成に関わる評価について検討し、「思いやり」・「規範」の2つの因子からなる小学生用道德性尺度を作成した。さらに、同尺度を用いて、道德性の状態について調査を実施、評価分析を行なった。

小学生用道徳性尺度作成のための回答シート

<調査内容>

1. 実施時期 令和4年 10月
2. 実施対象 全746名
3. 方法
 - (1) 調査方法 MSフォームス
 - (2) 分析方法 spss ver. 25



小学生用道徳性尺度				
項 目	factor1	factor2	α係数	
<第1因子 思いやり>				
1_わたしは、悪口を言われている人や、いじめられている人をかばいたいと思う	.807	-		
3_わたしは、人が嫌な思いをしていると自分も悲しい気持ちになる	.734	-		
2_わたしは、人に迷惑をかけた時には謝る	.733	-.104	.815	
5_わたしは、悲しそうな人やこまっている人の力になってあげたい	.633	-		
4_わたしは、なっている子がいたらなくさめたくなる	.528	.169		
<第2因子 規範>				
8_わたしは、友達から誘われても、悪いことはしないようにしている	-	.814		
10_わたしは、クラスみんなで話し合って決めたことを守ろうとする	-	.794		
9_わたしは、みんながだれか一人をいじめていたら、なんとかしたいと思う	-	.729	.811	
7_わたしは、学校で決まっているルールは守ろうと気をつけている	.295	.496		

小学生用道徳性尺度の作成と活用

取り組みの成果

学校現場においては、エビデンスベースで道徳教育の評価を行うことが難しく、学校及び教員においては効果的な道徳教育活動を計画するための適切な評価指標を持ち合わせていない状況にある。教員が児童の道徳性を把握するのに妥当性・信頼性を検討した適切で標準化された評価指標を用いることにより、道徳性にかかわる一面についての理解が深まったとともに、授業改善のためのアイデアが広がった。また、本尺度は授業の評価に用いられるのみならず、学校全体で取組む児童の道徳性の育成に役立つものとなった。

今後の展開可能性

本実践研究を通して、次年度以降の道徳教育の構築及び授業のイメージや指導方法の構築のためのアイデアが整理され、よりきめ細かい道徳教育が展開されることが期待される。児童の道徳性の育成に寄与するとともに、実践研究の推進と授業公開に向けての準備に役立つものと考えている。

徳島県内の学校園における 家庭教育支援推進に関する実践研究

—オンラインと対面のハイブリッド型養成講座の可能性—

徳島県教育委員会生涯学習課

07

幼児教育コース 木村 直子

徳島県教育委員会生涯学習課 横島 宏昭

課題設定

平成 28 年に文部科学省の重点化を受け、徳島県は徳島県家庭教育支援条例を制定し、県教育委員会生涯学習課を中心に、家庭教育推進事業「とくしま親なびプログラム集」を活用したワークショップを展開してきた。学校園からの依頼を受け、毎年 1000 名以上の保護者に参加頂き、非常に高い評価を得てきた。その後新型コロナウイルス感染症の世界的流行により 2 年ほど実施が少なくなっていたが、今年度に入り、WITH コロナ時代として様々な行事の再開される中、家庭教育支援のニーズの高まりから、学校園等からのワークショップの依頼が増えている。それに伴い、ワークショップを進行するファシリテーターの養成が急務となっている。これまで養成講座は、対面での 9 時～16 時までの 3 日間（講義・演習・実習）で実施し、修了した方に県教育長より修了証と委嘱状が発行されてきた。今後の WITH コロナ時代や持続可能かつ継続的な養成のあり方を模索するために、オンライン講座のための動画や資料等を作成し、持続的かつ継続的に徳島県の家庭教育プログラムを実行するファシリテーターが養成できるように準備する。



課題解決の方針

徳島県の家庭教育推進を目指したワークショップを進行するファシリテーターの養成講座を、オンラインによるリモートやオンデマンドと、対面での実習等を組み合わせたハイブリッド型の養成講座のパッケージとして計画する。

具体的な取り組み

徳島県の家庭教育推進を目指したワークショップを進行するファシリテーターの養成講座を、オンラインによるリモートやオンデマンドと、対面での実習等を組み合わせたハイブリッド型の養成講座のパッケージとして実施した。

●保護者版ワークショップのファシリテーター養成講座の概要

実施日案	講座	時間	内容の概要
第1日	第1講座	9:30～12:00	講義（ワークショップによる家庭支援の意義・ワークショップの效能）
	第2講座	13:00～15:30	演習（アイスブレイク）
第2日	第3講座	9:30～12:00	講義（家庭教育支援とは・プログラム集・プログラム集に基づくワークショップ）
	第4講座	13:00～15:30	演習（ワークショップの体験）
第3日	第5講座	9:30～12:00	実習演習（ワークショップ実施）
	第6講座	13:00～15:30	実習（ワークショップ実施）
	修了式	15:30～16:00	修了証授与・とくしま親なびげーたー委嘱

*第1講座・第2講座・第3講座はオンライン・リモート及びオンデマンドでも実施

●中高生・次世代版ワークショップのファシリテーター養成講座の概要

実施日案	講座	時間	内容の概要
第1日	第1講座	1時間・研修	講義（中高生・次世代版ワークショップの意義・目的・保護者版との相違点・ワークショップの展開過程）
	第2講座	9:30～12:00	演習・実習（ワークショップの実施）

*第1講座はオンライン・オンデマンドで実施

取り組みの成果

今年度、ハイブリッド型の養成講座を受講し、徳島県教育長委嘱の「親なびげーたー」修了証を取得したファシリテーターは16名であった。新しく養成されたファシリテーターらは、10月27日に大学生を対象とした中高生・次世代版ワークショップや、11月15日上八万児童館での保護者版ワークショップ、11月19日に開催された徳島県教育委員会主催の「家庭教育のつどい」での保護者版ワークショップ、12月5日に開催された池田中学校での中高生・次世代版ワークショップ等でファシリテーターを務められた。



今後の展開可能性

次年度以降にも、養成講座を実施する際には、今回作成したオンラインによるリモートやオンデマンドと対面での実習等を組み合わせたハイブリッド型の養成講座のパッケージを活用していきたいと考えている。このハイブリッド型の養成講座は、仕事に家庭にと忙しい子育て世代の保護者にとって、養成講座を受講するハードルを下げることに伴い、多くの保護者の参加が今後も期待できる。また、養成講座にとどまらず、ワークショップについてもオンライン化を行うことによって、徳島県内の学校園における家庭教育推進を進めていくことができると考える。

学校予防教育は，誰に，どこに，効果があるのか

—小学1年生から教員までを対象とし，
本当の自己肯定感，そして学校と職場適応の観点から—

小学校13校，中学校3校（関東圏1校，中京圏1校，関西圏7校，中国・四国圏7校）……………
参加児童・生徒数1,765人（小学校1年生から中学校1年生まで），参加教員数65人……………

08

心理臨床コース 心理・教育科学領域

山崎 勝之，内田 香奈子

予防教育科学センター 岡崎 花菜

課題設定

近年，児童生徒ならびに学校教員の自己肯定感は低下し，そのことが多面にわたり学校教育に問題をもたらしている。歪みのない本当の自己肯定感（自律性）は，心身健康，適応，学びを導く中核特性である。その向上から，児童生徒は，学校や学級での生活への享受感を高め，学校での健全な学びへと導かれる。そして教員は，教職への享受感を高めて，最終的には離職率の低下につながることを期待される。

課題解決の方針

鳴門教育大学が開発した学校予防教育「トップ・セルフ」を全国の多数の学校に実施する。トップ・セルフの教育目標は，本当の自己肯定感の向上に集約される。また，トップ・セルフは現在第3世代まで発展し，学校の教員が容易に実施できる出来映えになっている。こうして学校側主導の実施のもと，教育目標を達成することにより上記の課題解決が見込まれる。

具体的な取り組み

トップ・セルフ中，「本当の自己肯定感」，「感情の理解と対処」，「向社会性」の各育成授業を学校別，学年別に決定する。いずれの教育も全4時間，学校側が実施体制と時期等を決定。鳴門教育大学は実施のフィードバックを常時受けながら，万全のサポート体制をとる。

評価は，教育実施前後の1週間内で実施（児童・生徒は質問紙，教員はGoogle Formsにて）。児童生徒評価はもとより，教員評価はコード化完全匿名で個人情報は厳秘される。



取り組みの成果

教育前から自己肯定感や成就感の高かった児童生徒ならびに教員は、天井効果のため（またこれ以上、上昇の必要のないため）得点は変化がなかった。以下、向上が望まれる教育実施前の得点が低い者（中央値以下）の結果が報告された。

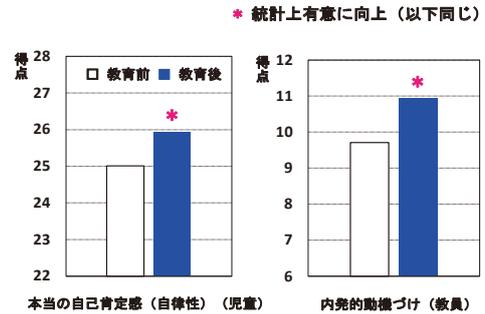
1. 本当の自己肯定感（自律性）への効果

本当の自己肯定感（自律性）はどう変化した？

児童： 本当の自己肯定感（自律性），その構成要素である
自己信頼心，他者信頼心，内発的動機づけ，すべて有意に向上
教員： 構成要素すべてが向上したが，内発的動機づけのみが有意に向上



児童は大きく，教員も部分的に，好影響を受けた。



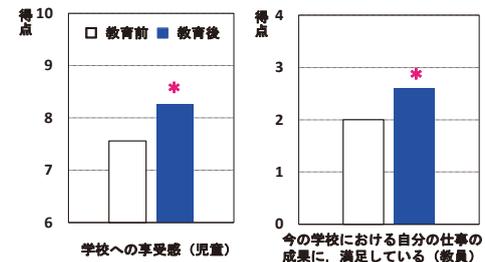
2. 学びの場ならびに職場としての学校への享受感等への効果

学校への享受感はどう変化した？

児童： 学校への享受感，その構成要素である「学校は楽しい」，
「クラスは楽しい」，「学校に来るのが楽しみだ」，すべて有意に向上
教員： 構成要素すべてが向上したが，「今の学校における自分の仕事の成果に，満足している」が有意に向上



児童も教員も，学校での生活を享受している度が高まった。



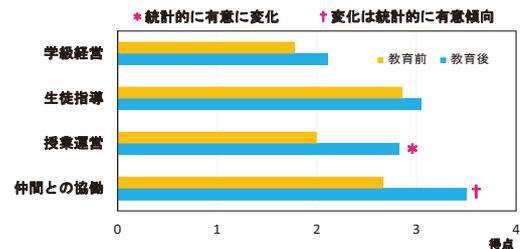
3. 教員の教職における活動に関する自己効力感の変化

教職における自己効力感はどう変化した？

教員： 自己効力感はすべて向上したが，授業運営「授業は子どもを引きつけ，わかりやすく実施することができる」が有意に向上

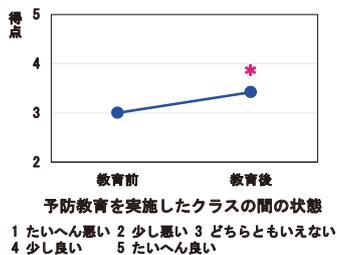


これまでの報告どおり，特に教員の授業力が高まった。

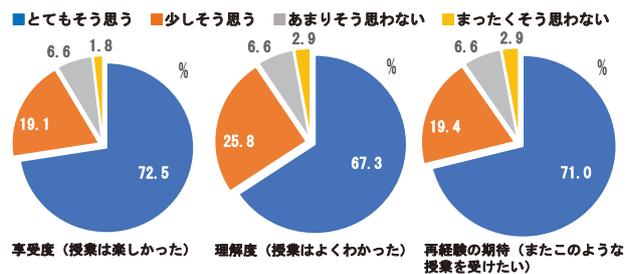


4. 予防教育に対する評価

先生はどう思ったか？



子どもはどう思ったか？



今後の展開可能性

児童は，この教育により，心身健康，適応，学びへの中核特性ともいえる「本当の自己肯定感」を伸ばした。効果の予測が難しかった教育実施教員についても，良好な効果が多面において見られた。

- さらに多くの学校で，恒常安定的に実施されることが推奨される。

〈参考文献〉

山崎勝之 自尊感情革命 一なぜ，学校や社会は「自尊感情」がそんなに好きなのか？— 福村出版，2017年
山崎勝之（編著）日本の心理教育プログラム 一心の健康を守る学校教育の再生と未来— 福村出版，2022年
山崎勝之 日本の学校教員の自己肯定感と教職享受感を高める 鳴門教育大学学校教育研究紀要，No. 37，
pp. 35-44，2023年

しらさぎ中学校との連携協定における 日本語教育実習・教材作成，教員への 教育研修に関する実施と整備について

徳島県立しらさぎ中学校

09

グローバル教育コース 宮部 真由美，田中 大輝，廣田 知子
しらさぎ中学校 大島 孝代

課題設定

2021年4月に開校した県立しらさぎ中学校（夜間中学校）には，日本語を母語としない生徒が在籍しており，日本語支援を必要とする生徒に対して日本語を学ぶクラスが開設されている。日本語クラスは日本語担当の教員を中心に，サポートに2名の教員が入り，運営されている。日本語担当教員は開校前に本学大学院グローバル教育コース日本語教育・日本文化分野の日本語教師養成プログラムの授業を1年間受講しているが，それ以外の教員は日本語を母語としない人に対する日本語教育についてはほぼ知らないという状況であった。本支援では，主に日本語担当ではない教員に対し，日本語支援を必要とする生徒との関わり方や日本語教育についてしてもらったことを課題とした。

課題解決の方針

- 1：しらさぎ中学校では日本語担当の教員が他の教員に対して行なっている日本語研修会（年4，5回）がある。そのうちの2回を鳴門教育大学の教員が担い，研修を行なう。
- 2：鳴門教育大学の大学院の学生がしらさぎ中学校の日本語クラスで日本語教育実習を行ない，しらさぎ中学校の教員に日本語を教える場면을客観的な立場からみてもらう。

具体的な取り組み

1：研修について

1回目の研修会は「異文化理解を目指して—日本語教育の事例から—」というテーマで実施した（2022年8月19日14:00～15:30）。1時間ほど本学の研修を担当した教員からトルコ，中国，インドネシアでの異文化体験，鳴門教育大学における「日本文化研究」と「日本語Ⅱ」の授業でのさまざまな異文化接触における摩擦などの紹介を行なった。残りの時間はしらさぎ中学校の教員の方々にグループになってもらい，学校での授業の中で日ごろ感じているさまざまな異文化摩擦を話したり，今までの海外旅行経験で感じたことを話したりしてもらい，全体で意見交換を行なった。

2回目の研修会は「少数派の気持ちは？」というテーマで実施した（2022年10月28日14:00～15:30）。トランプを用いた異文化体験ゲームにより，自分の常識（ルール）が通じないコミュニティに入ったときの戸惑いや自分の常識（ルール）が通じない人がコミュニティに入って来たときの戸惑いを体感してもらうとともに，そのような場

合に（さらに自分の言葉が使えない状況で）お互いがどのように意思疎通を図るかを実践してもらった。最後に、日本社会の中で少数派となりがちな外国人の気持ちと照らし合わせて考え、学校教員あるいは社会の一員としてどのような意識を持つ必要があるか、全体で意見交換を行なった。

2: 日本語教育実習について

鳴門教育大学の大学院生2名が日本語クラスで、あわせて4回の教壇実習を行なった（2022年9月）。大学院生にとっても本学の日本語教師養成プログラムの単位を取得するために必要な実習である。教育実習生の指導は本学の教員が行ない、しらすぎ中学校の教員には大学院生の授業を見学してもらい、評価してもらった。

取り組みの成果

1: 研修について

研修後のアンケートからは、具体的な異文化摩擦の事例紹介や体験的な異文化理解学習がたいへん参考になったという意見が聞かれた。また、一方的に講義形式で研修を行なうのではなく、しらすぎ中学校の教員同士で異文化摩擦や異文化コミュニケーションについて話し合う時間を設けたことも考えるきっかけとなってよかったようである。今まで、このようなテーマについて教員同士が話し合う機会はなかったという声もあった。日本人同士、日本人と外国人というナショナリティの枠組みを取り払っても、一人の人として向き合う気持ちや気づきの大切さ、思い込みや決めつけの危うさなどを喚起できた。

2: 日本語教育実習について

これまでほとんどの日本語授業を一人の日本語担当教員が行ってきたことから、実習生の日本語授業を評価することをとおして、自身の授業を振り返ることができたのではないかと考える。



今後の展開可能性

しらすぎ中学校の教員の方々に日ごろ感じている異文化摩擦や異文化理解の難しさというものについて考えてもらうきっかけ作りになったと思う。アンケートでは、「やさしい日本語」から日常の日本語へどのようにサポートすればいいのか何かヒントになるものがほしいという声や教材作りと授業実践についてのテーマを扱ってほしいという声があったことから、今後の研修では外国人の立場にたった学習指導を実際の日々の授業の中でどのようなことに配慮しながら進めていくべきかを具体的に考えていきたい。

また、今後、日本語支援を必要とする子どもたちが増加する可能性を考えると、しらすぎ中学校の教員の方々に日本語教育の知識・技術を身につけてもらい、他の学校に異動となっても、その後の現場で日本語支援を必要とする子どもたちへの対応に役立ててもらいたい。また、しらすぎ中学校が県内の日本語教育に関して、中心的な役割を担う存在となるよう支援をしていきたい。

教科部会（縦のつながり）と メンター制研修（横のつながり）を 活用した教育課題の改善

徳島中学校

10

学校づくりマネジメントコース 前田 洋一

徳島中学校 小川 善弘, 坂東 重樹

課題設定「若手や中堅の教職員に対する人財育成の推進」

連携校では近年 20・30 代の教職員が増えており、若手や中堅の教職員に対する人財育成の推進が課題となっている。そのため、令和元年度からメンター制研修を実施してきたが、コロナ禍への対応や教職員の多忙化等により負担感が大きく、研修機会を十分に確保できていなかった。若手や中堅教職員の人財育成を推進していく上での本校の課題が以下 2 点である。

- ① 授業力の向上
「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践ができていないか
- ② 持続可能な研修機会の確保
負担感を改善しつつ、若手・中堅教員の資質向上ができるか

課題解決の方針

教育課程内に設定した教科部会（縦のつながり）と月 1 回のメンター制研修（横のつながり）を軸に、すべての教職員がつながりスキルアップするしかけをマネジメントすること

※令和 3 年度、4 年度の 2 年間実施



具体的な取り組み

教科部会（縦のつながり）

年度初めに教育課程内に設置し、月 1 回程度テーマを決めて各教科ごとに計画・実施。ベテラン教員のノウハウを若手教員に伝達すること、タブレット端末などの操作について若手からベテランが学ぶ相互の縦のつながりを深めることを意識した。

Point 年間計画を立て、見直しをもって実施

月	R3年度の内容
5月	学習課題の書き方（めあてシート） 3観点の学習評価
6月	期末テストの問題作成
7月	「主体的・対話的で深い学び」を実現するための具体的な手立て →めざす生徒の学びの姿の可視化
8月	全国学テ&ステップアップテストの結果分析
9月	8月の結果を踏まえて授業改善
10月	タブレットの有効的な使用方法
11月	研究授業&タブレットの有効的な使用方法
1月	学年末に向けて学習評価
月	R4年度の内容
4月	「学力」について（共通理解）→各教科で育成する資質・能力 学力向上実行プラン
5月	【全体研修】「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価 →その後、各教科の評価基準、手立て
8月	【各学年会で】全国学テ&ステップアップテストの結果分析 →授業改善案
10月	【全体研修】xSync Classroomの使い方 まなびポケットに入っているAIDドリル
11月	期末テストの問題作成&評価基準

表1 教科部会（R3・R4年度）の年間実施内容

メンター制研修（横のつながり）

年度初めに運営チーム（40代のコーディネータ2人と採用10年次の教諭1人）を立ち上げ、事前アンケートの結果や昨年度の課題等について話し合った。年間計画を立て、1年間で10回の研修を計画・実施した。研修の中で採用6～10年次のメンターや講師も含めた採用5年以下のメンティの横のつながりを深めることで、先輩としてのメンターの自覚や、教職経験の少ないメンティだからこその悩み共有など、それぞれ横のつながりを深めることを意識した。

Point 運営チームを中心に企画・実施

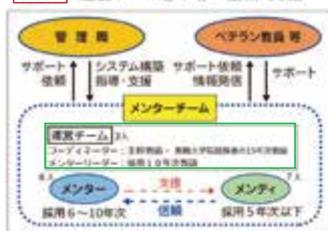


図1 徳島中学校版メンター制研修の推進体制

取り組みの成果：令和3年度末アンケートから令和4年度に課題を質的リメイクし改善!

R3年度 教科部会アンケート

【課題1】負担感

①実施回数(月1回程度)について

多い	2
適切である	24
少ない	2
実施する必要なし	0

7%が多い

メンター制研修アンケート

①年間10回(1回60分)の実施回数

多い	1
適切である	12
少ない	0

8%が多い

R4年度

研修の負担感を改善

①【メンター制研修の実施回数】

多い	0
適切である	15
少ない	0

100%適切である

○教科部会の回数を月1回→学期に2回へ。減らした分、学期に1回学力向上の全体研修を。
○メンター制研修6校時日課放課後→5校時日課放課後に変更(年間10回)

【課題2】運営チームのやりがい感(資質向上)

R3年度

項目	多い	適切である	少ない
メンター制研修に参加したことは自分の成長にプラスに働いたと感じますか?	2	1	0
メンター制研修に参加したことは自分の成長にプラスに働いたと感じません	0	1	0

メンター制研修に関するアンケート(運営チーム)

やりがい感UP→ミドルリーダーとしての成長へ

R4年度

項目	多い	適切である	少ない
メンター制研修に参加したことは自分の成長にプラスに働いたと感じますか?	3	0	0
メンター制研修に参加したことは自分の成長にプラスに働いたと感じません	0	0	0

○採用10年次の教諭が行うミドルリーダー研修の特定課題研究ともリンクさせ、各研修終了後にアンケートを行い、運営チームで省察しながら次回の研修を企画・実施していった。ミドルリーダーとしての成長にもつながり、次年度はこの10年次教諭がコーディネーターとしてメンター制研修を運営していくことで、持続可能な研修になっている。

全体の取り組みの成果

教科部会(縦のつながり)

教職員間のつながりが深まり、学期末の評価・評定基準の共有をスムーズに図ることができた。空き時間などを利用して、授業実践等の共有が行われるようになり、若手教員の授業力向上につながっている。

教科部会のメリット(複数回答可)

教員間のつながり	19
授業実践などの共有	15
定期テストの開催状況	9
評価・評定基準の共有	20
プロジェクトチームの共有	11
研究授業や統一大会などに向け	12
その他	0

アンケート結果より

メンター制研修(横のつながり)

運営チームによる企画・運営と放課後に研修時間を十分確保することによって、次年度以降も継続できる持続可能な研修となった。同年代の悩みを共有することで横のつながりが深まり、ミドルリーダーの人財育成の場としても効果的である。また、研修後は通信を全教職員に配布することで研修内容の周知と参加者へのフィードバック、更に教職員間の斜めのつながりも生まれている。

R4年度

項目	多い	適切である	少ない
メンター制研修に参加したことは自分の成長にプラスに働いたと感じますか?	3	0	0
メンター制研修に参加したことは自分の成長にプラスに働いたと感じません	0	0	0

メンター制研修に関するアンケート(メンター・メンティ)

教職員間の縦・横・斜めのつながりが、生徒一人一人が輝ける学校の実現へとつながる

今後の展開可能性

運営チームの企画・運営で5時間日課の放課後に月1回実施するメンター制研修が定着してきた。今後は、10年次研修を終えたミドルリーダーが中心となり、各々の教員としての強みを生かして更なる若手の人財育成を進めていきたい。また、不登校などの喫緊の課題に対して何ができるのかを考え学校全体に提言していくプロジェクトチームとしてのメンター制研修にもしていける可能性がある。学びを通して教員がつながり成長していくことで、生徒が更に成長できるそんな学校にしていきたい。

【メンター制研修の内容について】

実施日	内容	出席者数	出席率	出席者数	出席率
4月7日	グループワークセッション 安心・安全な学習(授業)づくり	2	7	1	10
4月28日	学級/授業づくりの振り返り 研修づくり	2	7	1	10
6月24日	学級運営、いいところ探し 授業実践	2	7	1	10
8月20日	人権教育「空」の授業 家庭科のこれからの人権教育	2	7	1	10
8月27日	学級運営の振り返り 学校行事	2	7	1	10
9月30日	授業の授業づくり	2	7	1	10
10月26日	ベトナム研修	2	7	1	10
11月24日	授業の授業の振り返り スローモーション	2	7	1	10

実施後のアンケートをまとめたもの

「ポジティブな行動支援」の推進

～関係機関（行政・専門家）との連携、
および記録用紙の実用化に向けて～

吉野川市教育委員会 教育研究所

11

特別支援教育コース **坂口 純子, 大谷 博俊, 小倉 正義**

吉野川市教育委員会 教育研究所 **山下 幸**

課題設定

ポジティブな行動支援（以下PBS）とは、望ましい行動を積極的に賞賛・承認することにより、その結果として問題行動を最小化する教育的・予防的支援の枠組みである。現在、徳島県では県教育委員会が主導し、PBSの考え方の浸透を図り、各園・学校全体でその取組の推進が図られている。令和3年度教育研究所が実施した調査によると、研修等の実施により各園・学校へPBSの考え方が浸透してきている一方、学校全体でのPBSの実施や記録方法、保護者や外部専門家との連携についての課題が明らかとなった。そこで本研究では、学校現場で取り組みやすいPBS実践の記録方法を開発すること、保護者や外部専門家との連携のあり方を検討することを目的とする。

課題解決の方針

1. 吉野川市内の学校（保育所、子ども園を含む）におけるPBSの実施状況や課題について把握するための調査を行う。
2. 学校機関が使いやすい目標設定シートや記録用紙を作成する。
3. 保護者へのPBSの啓発、および学校と外部専門家との連携のあり方を検討する。

具体的な取り組み

1. PBSの実施状況や課題についての調査（令和4年8月1日～8月19日 教育研究所実施）

吉野川市内の保育所（認定子ども園を含む）・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校を対象に調査を実施した。回収率は100%（28校）であった。質問項目は、全14問で主にPBSの実施状況やその記録方法、外部専門家との連携、実施する上での課題等についてであった。調査結果として、記録方法の困り感としては、「評価基準があいまいになる」が最も多かった。

2. 学校機関が使いやすい目標設定シートや記録用紙の作成

1の調査結果をもとに、効率的かつ専門的な知識がなくても簡易に作成できる目標設定シートや記録用紙の試案を作成した。作成したシートや記録用紙の試案は、吉野川市特別支援連携協議会のワーキンググループ

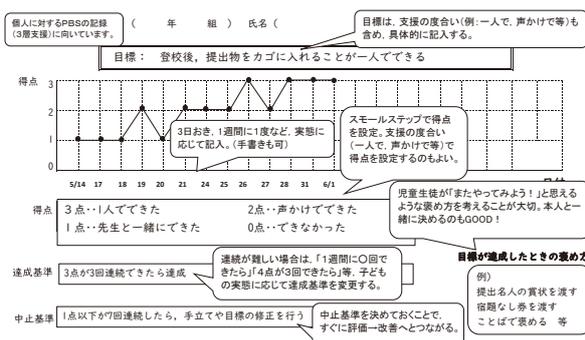


図1 指導者用グラフ版の記録用紙（記入例）



図2 児童生徒用シール版の記録用紙（記入例）

プにて改善点を協議した。目標設定シートは、井上（2015）や三田地・岡村（2019）、平澤（2020）を参考にし、第3層支援のケース会議にも使用できるシートを3種類作成した。記録用紙は、児童生徒用と指導者用を作成し、シール版や得点版、グラフ版、課題分析版と指導目標や記録者に応じて使用しやすいように数種類作成した。（図1、2）

3. 保護者へのPBSの啓発、および外部専門家との連携

保護者へのPBSの啓発については、令和3年度本学発達臨床センターと徳島県教育委員会で連携し作成した「保護者用PBS啓発リーフレット」を吉野川市内に通園、通学している園児・児童生徒の保護者に配布した。

1の調査結果において、連携した外部専門家として挙げたのは、順に巡回相談員、徳島県立総合教育センターの指導主事、教育研究所研究員であった。本学との連携においては「指導力・人間力向上研修」(令和4年5月実施)において研究代表者がPBSの研修を実施した。また、令和4年11月には同代表者が吉野川市特別支援連携協議会においてPBSに関する情報交換会及びワーキンググループ（図3）において指導助言を実施した。また、目標設定シートや記録用紙の作成においては、同代表者が教育研究所の山下研究員と連携しながら作業を進めた。



図3 情報交換会の様子

※保護者に配布した「保護者用PBS啓発リーフレット」および作成した記録用紙は、本学発達臨床センターWebページ (<https://www.naruto-u.ac.jp/center/crchd/>) に公開している。

取り組みの成果

本研究により、吉野川市内の園・学校におけるPBSの実施状況や課題が明らかとなった。また、課題としてあげられた目標設定シートや記録用紙（以下記録ツール）については、調査結果を活用しつつ実際に使用する学校現場の教員や特別支援コーディネーターの意見も取り入れ作成することができた。これらのデータファイルを各学校に配布、活用してもらうことにより、学校毎、児童生徒毎にカスタマイズしながらポジティブな視点で目標設定できたり、効率的に記録したりすることができると考えられる。また、記録用紙のデータファイルを本学発達臨床センターのWebページに掲載することで、PBSに取り組んでいる吉野川市以外の学校においても活用することができる。

保護者への啓発については、PBSのリーフレットを配布した。これにより、保護者がPBSの考え方や家庭でのポジティブな子どもへの関わり方を知る1つの機会となった。外部講師との連携、特に本学との連携において、これまで吉野川市においては研修会の講師が主であった。しかし、今回の共同研究において、学校で使いやすい記録ツールの作成や情報交換会への参加により、より学校現場のニーズに対応した支援を実施することができた。

今後の展開可能性

今後の展開として、第一に記録ツールを使用した支援実践例の蓄積と分析を進めることが大切であると考えられる。研究成果を入手できる本学発達臨床センターWebページのURLを広く広報し、実際に使用した学校や教員への支援を進めていく。また、作成したツールを吉野川市以外の学校にも広く活用してもらうためにも、徳島県教育委員会など他機関と連携を図り、よりよい活用の仕方や枠組みを作ることも重要になってくるであろう。

第二に、大学教員の外部講師としての連携の在り方である。大学教員は他の外部講師と比較して、連携している学校が少なかった。今回、教育研究所と共同研究を実施することで、地域の情報交換会に参加し、学校現場の現状やニーズの把握、教員との繋がりを持つことができた。今後も地域を拠点とした情報交換会等で各学校のニーズを把握することが学校と大学との連携を深めていく糸口となると考えられる。本学の「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」の積極的な活用に期待したい。また、連携においては、Web会議や掲示板の活用、記録ツールの利用等、大学教員と学校教員の円滑かつ効率的な連携方法について検討が必要であろう。

〈引用・参考文献〉

井上雅彦（2015）. 家庭で無理なく対応できる困った行動Q&A 自閉症の子どものためのABA基本プログラム4. 学研. 192

三田地真実, 岡村章司（2019）. 保護者と先生のための応用行動分析入門ハンドブック. 金剛出版. 176

平澤紀子（2020）. 学校で子どものポジティブな行動を支援する学校でPBSを行うための実践計画. 実践障害児教育. 第48巻第5号. 24-27

校内サークル型メンター制研修 (若手教員の育成を軸とした全教職員の力量形成を目指して)

土成小学校

12

学校づくりマネジメントコース 前田 洋一

土成小学校 松村 哲男, 森北 直樹

課題設定

学校現場が抱える課題が多様化・複雑化し、多忙化する中で、若手教員が少し上の先輩教員やミドルリーダーである中堅教員に質問しづらい職場環境がある。このことによって、不安や悩みの解消に至らず、孤独を感じている若手教員がいる。そこで、メンター制研修を実施し、若手教員の悩みや困り感の解消を図るとともに、全教職員の力量形成を図る。

課題解決の方針

全教職員をメンターチームととらえ、コーディネーターを核に研修を企画し、若手・中堅・ベテラン関係なくメンターが入れ替わる等、双方向に対等（フラット）な関係で学び合う研修を実施する。若手教員の悩みや困り感の解消に努めるとともに、組織に貢献する研修を通して、安心した研修の場づくり、職場環境づくりを目指す。また、メンター制研修を軸に教職員が互いに学び合い、助け合うことのできる協働的な組織づくりを目指す。

具体的な取り組み（土成サークル型メンター制研修の実施について）

【学級開き・家庭訪問】
若手教員からの**希望**で実施した。中堅教員からそれぞれの学級開きのやり方を聞いていく中で**相互**に新しい気づきや学びがあった。



【教科学習(理科)】
発泡スチロールで骨を、栗のネットとビニル袋で筋肉を表し、筋肉の伸び縮みによって骨が動くということが、視覚的にわかった。**ICT**と**具体物**、両方の良さを**実感**した。



【校区を巡ろう】
全教職員で校区のフィールドワークを実施した。**地域の財産**をまわり、SNSで説明を聞く等の工夫も加わって充実した研修になった。



【アサザミーティング】
メンターリーダーとコーディネーターが2学期の研修計画について**ざっくばらんに**話し合った。



【チームで授業をつくる】
県教委計画訪問でも研究授業後、上・下学年チームに分かれ、対話型授業研究会を通して**学び**を深めた。



【チームで授業をつくる】
中堅教員が授業で使う「Meta Moji」について**若手教員**が**メンター**となって組織に**貢献**する自己主導型研修を行い、活用について学びがあった。



主体的・対話的な土成型授業研究会



メンターチーム



記録者 **司会者** **授業者**

指導主事



貢献



取り組みの成果

－ 先生方からインタビュー 一部抜粋 －

【成果①】責任を共有し、貢献する研修を通して

- ・先輩教員も若手教員も関係なく誰からでも学ぶという規範が醸成された。
- ・組織の一員としての自己効力感が高まり、心理的安全性が確保された。
- ・互いに尊敬し合う協働的な組織づくりにつながった。

【成果②】学び合う組織文化が生まれた。

- ・メンター制研修と職員室等での関係性の質の向上につながった。
- ・教職員同士の同僚性が高まり、日常業務の中でも自然発生的にコミュニティが生まれ出した。

貢献

- ・先輩の先生方の役に立ちたい
- ・少しでも貢献できた
- ・先輩に頼られた



心理的安全性の確保

- ・聞いてもいい安心感
- ・今更聞けない→聞けた
- ・自分の気持ちや考えを伝えやすい

関係性の構築

- ・周りの先生方を見るように
- ・準備の早いベテラン教員に聞きやすく
- ・職員室などで聞きやすい環境

管理職から

- ・本音が出ている
- ・教育に関する世間話
- ・若手教員が学びやすい雰囲気
- ・同僚との信頼関係



【成果③】教職員の力量形成

- ・教員の知識・技能・経験を他の教員も共有でき、校内研修及びメンター制研修の活性化につながった。

力量形成

- ・能動的な授業参観
- ・積極的な発言
- ・やるまでの過程が大事
- ・授業力向上
- ・チームで学ぶ効果



【成果④】メンター制研修を軸とした研修の整備

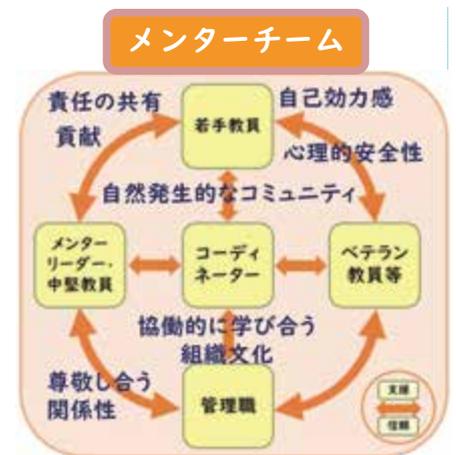
- ・校内研修及び初任者・中堅教員等の法定研修が整備できた。

今後の展開可能性

メンター制研修を通して、日々の業務の中で同僚と自然に語り合い、協働的に学び合う文化が生まれた。それは、組織の中で責任を共有し、貢献できる研修を通して、自己効力感が高まり、心理的安全性が確保され、先輩教員も若手教員も関係なく誰からでも学ぶという規範が醸成されたからである。そう考えると、「土成サークル型メンター制研修」は若手中堅・ベテラン教員も互いに尊敬し、いつでもどこでも相互に学び合える、学び続けるという組織文化を醸成するためのきっかけだったといえる。

今後も、組織において、若手教員が先輩教員から学ぶことだけでなく、中堅教員が「ICTに詳しい若手教員にもっと教えてほしい」と言ったように自分の考え方や行動が変わり、教職員相互に協働的に学び合う文化の醸成に務めていくことが肝心だと考える。

そのためにも、研修の枠組みを超えて、自然発生的なコミュニティを生み出し、学び合う組織文化を醸成できる「土成サークル型メンター制研修」のさらなる発展に向けて探っていきたい。



園内の学びの環境の改善と 新しい学びの創造の有効性について

立江幼稚園，南小松島幼稚園

13

幼児教育コース 佐々木 晃，湯地 宏樹
立江幼稚園 坂本 由希
南小松島幼稚園 井原 美雪

課題設定

環境を通して行う幼稚園教育の具現化を図るための、知的関心を高め、体を動かす気持ちをもつ環境整備と教育効果について明らかにする。

課題解決の方針

○知的関心を高める学びルーム環境整備による教育効果

- ・絵本の部屋の環境を充実させ、言葉や文字に対する興味や関心、感覚などを育む。
- ・絵本の紹介や貸し出しの活動を通じて、家庭における読み聞かせや親子のコミュニケーションを活発にする。

○体を動かす気持ちをもつ砂場環境の整備による教育効果

- ・すでに定着している運動遊びによる粗大運動の習慣に加えて、砂場道具・遊具などを使った微細運動を促進させる。
- ・様々な砂場道具・遊具を使ったままごと遊びや色水遊びなどで、図ったり、比べたり、容器を移し替えたり、変化を推論したりする活動を促すとともに、思考の言語化を促す。

具体的な取り組み

○絵本の部屋の環境を充実

- ・落ち着いた雰囲気で見たり、保育者による読み聞かせを聞いたりできるよう幼児用ソファ、机の配置に工夫した。
- ・絵本の蔵書数を増やすとともに、幼児が見やすく手に取りやすく配置した。
- ・絵本の貸し出しを行い、親子での読書を励行した。

○砂場環境の整備

- ・砂場道具・遊具など、幼児の興味や関心を刺激するよう配置を考えた。
- ・園内の植物や水・土・砂など自然環境を活用した遊びが発展するよう環境を構成した。
- ・幼児の砂場遊びに保育者も一緒に関わりながら、幼児の気づきや感じ方、考え方や表現の仕方を観察し、思考力や判断力、表現力等の基礎を促す援助を工夫した。

取り組みの成果

1. 「絵本大好き」の気持ちと、言葉や文字に対する興味や関心、感覚などが育まれた。

園長の記録より・・・当園では絵本の部屋が2階にあったため、幼児たちだけで自由に利用することができなかった。絵本の部屋や絵本に親しみをもてるようにキッズソファや机の配置に工夫した。

幼児たちは「新しいソファなん?」「かわいい!」と喜んでかけ寄り、かわるがわるに座っては絵本を楽しむ姿があった。やわらかなブルーのソファを置くと絵本の部屋が明るい雰囲気となり、幼児たちにピッタリのサイズ感で友達と寄り添って1冊の絵本を読む様子が見られている。



2. 絵本を通じた家庭との連携が進んだ。

園が鳴門教育大学と連携して絵本の部屋の環境を充実させた意図や意義を保護者に伝えたことで、幼児期の学びやそのための環境の改善の重要性が伝わった。特に、言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることや読書やより心を動かすような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすることへの理解が進んだ。

また、幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、保育者や親などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようになった。絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすることなどへの関心も示すようになった。写真は、冬休み前の絵本貸し出しの様子。保護者と一緒に好きな絵本を選んだ。



3. 豊かな遊び体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりすることが増えた。

園長の記録より・・・幼児たちは、園庭の草花やヤマモモなどの実をすりつぶして色水を作ることが好きである。できあがった色水は、ペットボトルやプリンカップなどに入れて持ち帰ったり飾ったりして遊んでいた。色水セットは、本物同様のティーセットで、ティーポットや透明のカップやグラス、スポイトやスプーンなどが付属されている。素敵なカップに心が躍り、きれいな色を作ろうと花びら選びも真剣であった。透明のグラスに入れると色が鮮明に見えて、色の変化がよくわかる。また、一層おいしそうなお汁に見えるようそのままとやお店屋さんごっこなどへと遊びが広がっている。



4. 保育者の幼児理解や環境構成のスキルアップが図られた。

今回の研究では、適時、鳴門教育大学から幼児期の学び等に係る助言・指導を受け、日々に砂場環境の構成や再構成を工夫してきた。また、保育者も幼児の砂場遊びと一緒に関わりながら、砂場道具・遊具などを使って自然環境と関わっていく幼児の気付きや感じ方、考え方や表現の仕方を観察し指導計画を練り、指導方法を考え、実践し、反省・評価を重ねてきた。

この積み重ねの過程で、幼児が気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする、いわゆる思考力や判断力、表現力等の基礎を促す援助や環境構成をスキルアップすることができた。

今後の展開可能性

園内の学びの環境の改善と新しい学びの創造の有効性について実践と研究を進めてきた結果、幼小接続についての課題と研究の必要性が明瞭になってきた。

今後は、絵本や保護者との連携の成果を踏まえ、小学校就学に向けて、幼児が日常生活の中で文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすることの大切さを中心に研究を進めていきたい。

令和4年度学校支援事例報告集

2023年3月 発行

編集・発行 鳴門教育大学地域連携センター

〒772-8502

徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地



国立大学法人
鳴門教育大学